

声楽コースに独自性と特徴をもたせるために

准教授 田野崎 加代(声楽)

1. 個人レッスンの教授法

まず、自分の個人レッスンの教授法を考えてみることから始めると、次のこと(A、B)を念頭に置いて指導にあたっている。

- A. 充実したレッスンになるよう、学生に予習と復習を心がけさせる。そのために、各学生の性格と声質、そして能力に見合った選曲をし、与え、2週間で1曲は暗譜をさせ、仕上げていく進め方をしている。
- B. ひとりで譜面を読めない学生に対しては、焦らず、期間を設けず、レッスンの中で一緒に譜読みをし、次のレッスンまでの練習の仕方を習得させる。

次に、教授法を更に深く記述してみると、次のことがあげられる。

① 「歌う楽しさ」の習得

2年後、又は卒業後も続けて歌を勉強していきたいという意欲を持たせることで、生き甲斐をもち、楽しく人生を過ごしていけるように、歌うことが潤滑油の役割を担って欲しいため。

② 「歌の深さ」の習得

喉だけでなく、顔面の響き、腰の支え、呼吸のバランスを考え、正しい体の使い方、歌う方法、例えば、低音から高音まで均一の響きの音色で歌い、レガートに奏でるメロディに歌詞を乗せて表現するベルカント(Bel canto)唱法での歌い方の習得。美しい音色を追求することで、聞く側に心地よく音楽を伝え感動させ、歌う側も聞く側と一体化し交流できるようにする。

③ 「ひとり立ち」

自分本来の声を理解させ、自分の性格や能力に見合った曲を自分で探し、勉強していく力を養わせる。また、自分の適性に気づかせ、早めの進路変更も視野に入れて勉強させ、合唱団の指導者など、幅広い音楽活動も考えて指導する。

2. コースを超えた声楽レッスンのカリキュラム

このような項目を基に教授しているが、短大2年間を自分の方向性を決める準備期間とする。そのためにも、いろんな可能性を考えて選択科目を増やすなど、自由に必要な科目を選択できるように、コースの垣根を取り外す必要がある。例えば、極端に言えば、バレエと歌が好きな学生に、バレエも歌も主で45分とらせるなど、2年後どちらにでも進むことができるような両方の可能性ある科目を勉強できる柔軟なシステムがこれからは必要ではないだろうか。

また、今までに出会った B のような学生の中に、語学や団体行動が苦手ではあるが、ずば抜けて声や音楽性が良い学生に巡り合うことがある。このような学生は今のシステムではなかなか単位が取れず、卒業できないケースがあるので、特別に優れている技術があれば、苦手な科目を免除し、優れたことを伸ばし、コンクール等に出せるカリキュラムを作り、演奏家として社会に送り出していけるような特徴あるシステムが必要ではないだろうか。

声楽は『良い声帯をもっている』という素質があれば、指導する立場からでも楽しく教えることができ、教え甲斐があり、演奏家として社会に通用する人材に上手く育て上げることができれば、必ず、大学にとってもプラスになると思う。

3. 声楽コースの学生に

現在、個人レッスンでは、1 年目、ベルカント唱法を念頭におき、正しい発声法を基礎から習得させるために、週 2 回各 30 分の中で発声に重点をおき、素直な声はそれを生かし、癖のある声は少しずつ修正しながらテクニックをつけさせるといった声作りの一本化に努めている。人は顔が皆違うように、同じソプラノでもいろいろな色の声をしている。そこで、学生の本来の声を知るために、どのような声帯をしているか、どのような体型でどのような支え(appoggio)をしているか、又どのような表現力を持っているかなどを探りながら、何を補い何を伸ばしていくかをまず見極める必要がある。その後、曲に移り、難しい箇所から、歌詞をつけずテクニックを考えながら母音で練習させる。そのあと歌詞の内容を踏まえ、どのように感じ、表現したらよいかを考えさせ、自分の感覚を重視させ歌わせる。2 年目は、1 年目で勉強した発声を基に、ロッシーニ(Giacchino Rossini/1792～1868)、ベッリーニ(Vincenzo Bellini/1801～1835)を主に、ドニゼッティ (Gaetano Donizetti/1797～1848)、又はヴェルディ(Giuseppe Verdi/1813～1901)のロマン派作品の歌曲をとおし、その時代の歌唱表現を踏まえ、更に発声のテクニックを高めていく。また、曲を歌い上げるのには、伴奏者との関わりも大事であるゆえ、歌っているメロディの他に伴奏の幅広い音域と音量とのバランスを考えながら、フレーズの取り方、呼吸などが一体になるような音楽作りをし、まとめ上げている。また自ら、向上心を養うため、自分の長所・短所を知る必要があり、どのように表現していったら良くなるかを植え付けるためにも自分の演奏を客観的に聴くための録音をとらせるようにしている。そして、2 年間のまとめとして、卒業試験では、能力に見合った自由曲の課題で、ヴェルディ以前のオペアリアを歌うことも可能としている。また、日本人としての心を大事にし、西洋音楽との対比の中から日本の素晴らしさを伝えていくためにも日本語の発音と情緒をかもしだせる日本歌曲の歌唱法を勉強させ、卒業試験の課題曲の中で歌わせている。

このような試験課題曲は、平成 12 年度に大幅な改正がなされ現在に至っているが、現在の学生には個人差の開きもあるので、各学生に見合った課題で、素質があり歌える能力のある学生にはそれなりの曲を与え歌わせるといったような、もったのびのびとした発想による、伸びる学生を更に伸ばしていける課題を考えていく必要があると思う。このことについては今までにも、部会や FD 研修会で何度か話し合っていることではあるが、時代で制限している課題曲の垣根を取り払って、プッチーニ(Giacomo Puccini/1858～1924)や

マスカーニ(Pietro Mascagni/1863～1945)作品など、近代の作曲家の作品も学生の能力に合えば、教材として取り上げ、歌わせていく方向で考えていくべきであると思う。

今までの傾向で、学生自身が積極的に勉強したがる曲をあげてみると、甘いメロディや流れる印象の強い曲が1位で、次に派手で演奏ばえのする曲を本来なら一番に選曲したいのだろうが難しいので敬遠するのか2位を示し、軽くて歌いやすい曲や短調の悲しい曲が3位といったように挙げられている。やはり、音楽大学の専門を学ぶ場で、専門の担当教員の監督の判断の下で、学生の声質、能力、性格を見極めた上で、どの時代の名曲をも勉強できる機会を与えてあげるべきであると思う。

今後、声楽コースにとって、更に効率良い指導法を考え教授できるように、これからも研究考察していきたいと思う。

4. 声楽教育の伝統

なお、次にあげる3点は、今の昭和音大を築き上げてきた原点とも言えよう。こうした教育を実際に身に持って体験した筆者は、若い頃の蓄積を今でも忘れることなく、技術面でも精神面でも、後世に伝える役割を担っていると考えている。

1. 創立者である下八川圭祐(故)学長が、若いうちから良い発声を身につけさせようと、自ら発声の授業を受け持って、学生全員にベルカント唱法の手ほどきを行ったこと。
2. 2年間という短期間でも、他大学の4年生に匹敵する実力を身に付けさせようと、1年間に4回、計8回の試験を行い、2年間のうちに大学四年間で学ぶ実力を徹底させたこと。
3. 創設当時から、ヨーロッパで生まれた本場の音楽、文化に近づけるために、外国で活躍する外人講師を招聘し、個人レッスンの中で、その国の言葉に直接触れさせながら受講させ、感性を磨かせていること。

